

<b>Title</b>	『ジムプリツィシムス』教養小説論の再検討について
<b>Author</b>	義則, 孝夫
<b>Citation</b>	人文研究. 21 卷 10 号, p.883-895.
<b>Issue Date</b>	1970
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学部
<b>Description</b>	菅谷恒徳教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

## 『ジムプリツィシムス』教養小説論の 再検討について

義 則 孝 夫

この小論においてわたくしは、主として小説形態論の立場からすすめてきた従来のわたくしのいくつかの試みと関連して、ふたたび、ドイツ・バロックの代表的作家グリメルスハウゼン (Hans Jakob Christoffel von Grimmelshausen 1622?~1676) の長篇小説『ジムプリツィシムス』(Simplicissimus) にまつわる教養小説論の問題、つまり簡単にいえば、この作品が教養小説であるかないかという論争の問題をとりあつかうことになる。これはいわば古くして新しい問題であり、1920年代から1960年代までの50年間にわたって、たえず賛否両論がたたかわされてきたとみられるのであるが、時の流れに依じて、戦前は賛成論が、戦後は否定論が、もっぱら優勢を保っていた。殊に否定論は——念のためにいい添えるが、教養小説全般を否定する否定論ではなくて、『ジムプリツィシムス』教養小説論を否定する否定論は、学問的にみてその裏付けが強固であり、これに反撥するのはほとんど不可能であるかに思われるのである。ところが最近、教養小説論全体の復活の気運と相まってのことであろうが、『ジムプリツィシムス』をも教養小説として再評価してはどうかという声、わたくしの耳に聞こえてきたのである。もちろん、その声はドイツからひびいてきた。1967年4月に発行されたゲルマーニッシュ・ロマーニッシュ・モーナツシュリフト第17巻第2分冊 (Germanisch-Romanische Monatsschrift, Neue Folge Bd XVII, Heft 2, 1967) にヴェルナー・ホフマンの「グリメルスハウゼンの『ジムプリツィシムス』はやはり教養小説ではないのか?」(Werner Hoffmann, Grimmelshausens ‚Simplicissimus‘—nicht doch ein Bildungsroman?) という標題の論説が掲載されているのを見出したとき、わたくしはいままでもなく異常な興味を感じた。とまどいもあったが、しかし期待もあった。読み終わってその結果をいまこの小論にまとめようとするのであるが、この小論によせるわたくしの意図はしたがって、『ジムプリツィシムス』教養小説論の再検討をわたくしみずからの手で展開するのではなくて、再検討の主張もしくは再検討を要望する声について、わたくしなりの論評を加えるということにある。それにともなうわたくしの筆も、いくらか軽やか

な動きを許されるであろう。

はじめにぜひとも述べておかなければならないことは、『ジンプリツィシムス』について教養小説論を展開するためには、一方ではドイツ・バロック文学と称されるものの特性についての基本的な理解と、他方ではドイツ教養小説と称されるものの独自性についての基本的な理解とが、ともに相並んで確立されていなければならないことである。このどちらがゆらいでも、そのゆらいだものうえに成り立つ論議は崩壊の危険にさらされている。これはいわば当然のことであろうが、この当然のことは往々にしてきわめてなおざりにされやすいのである。一般にある作品の教養小説論というとき、それはその作品を教養小説的に、さらにいえば、教養小説として解釈することだと理解されているかに思われる。しかし、それは軽率のそしりをまぬがれないであろう。ある作品を教養小説という形態概念で捕捉できるかどうか、または捕捉してもよいかどうかは、その作品の実態と教養小説という概念の内容との綿密な分析のうえにたった、純粋に科学的な問題である。単なる感覚や主観の問題ではない。そしてまさにこの命題をつきつけるとき、『ジンプリツィシムス』と教養小説とは容易に結びつかないのである。両者のあいだに渡せる橋はきわめて細くてもろく、思考の重みにほとんど耐えることができないであろう。それにもかかわらず、先に述べた論者ホフマンがもし頑丈な橋を架け渡すことに成功したとすれば、わたくしたちは大いに彼に感謝しなければならない理由もある。つまり『ジンプリツィシムス』教養小説論を完全に理論的に組み立てることに成功すれば、それはまことに偉大な業績であろうからである。

小説『ジンプリツィシムス』を形態史的に眺める場合、まず最初に問題になるのは、そのスペインの先駆者ピカロ小説 (Picaresque) との比較である。これに関する研究文献は古今を通じて決して乏しくないが、論者ホフマンもまずこの点から出発している。総括的にいって、ピカロ小説との比較そのものに関するかぎり、ホフマンの論はかなりの説得力を持っている。考察方法も多角的であり、かつ厳密であって、現在の研究段階ではこれ以上にすすんだ可能性を求めることは難しいであろう。ホフマンは大きくいって、形式的 (formal) な問題と内容的 (gehaltlich) な問題とのふたつに分けて、類似点および相違点を検討している。従来は形式的にはピカロ小説と同一であるか、少なくともこれに準じ、内容的には大きく異なると判断するのが常道であった。この常道は必ずしも完全に誤っているとはいえず、したがってホフマンもまた、全体として内容的特性よりも形式的特性に同一点もしくは類似点があることを認めている。彼によれば、形式的に

はまず第一に小説の自叙伝的形式、言葉をかえていえば「私物語の形式」(die Form der Icherzählung)と、第二に各種の冒険および挿話の羅列の技術を、このドイツの小説は完全にピカロ小説からうけついでいる。また、更にすすんで主人公の形姿も多くの点でピカロを思い起こさせる。しかし内容的にみれば、主人公の姿勢および外界の出来事に対する反応は、多くそのスペインの手本からはなれていて、ドイツの小説の主人公にはたえず宗教的・倫理的規範を忘れぬ用意があるばかりか、すすんで自己をその規範に合致させるという要求が見られる。——この主張は従来のもを伝承したもので、いささか色あせて見えるがやはり正しく、ホフマン自身はそれを試みていないが、ここにいう内容的、もしくは内面的な特質を作品の内部において確かめることは、かなりの程度に可能であろう。そしてそれは一部の教養小説反対論者が唱えるように、まったく無益な仕事であるとは、わたくしにも思われぬ。ところでホフマンの特徴はここで、この従来まったく内容的な問題であったものを形式的な問題へ投影し、これまで論争の多いこの小説の「私形式」(Ich-Form)の再検討へ進んで、作品中の「物語る私もしくは回顧する私」(das erzählende Ich oder das rückblickende Ich)と「体験する私もしくは行動する私」(das erlebende Ich oder das handelnde Ich)とを区別しなければならないと論じていることである。もとよりここで、この作品の解釈に新しい文芸学的手法がもちこまれるわけであるが、この古い時代の作品が新しい手法をそのままうけつづけるかどうかの問題は、のちに述べるところとも関連するのでここでは一応措くことにし、「私形式」の再検討が今後更に必要であるという事実だけに注目しておきたい。これについてはわたくしもかつて、この形式の伝承を単に文体上の問題としてのみうけとるのか、それともなんらか創作面において特別な含みをもたせるのか、という疑問を提出したことがあった(『グリムメルスハウゼンの諸問題』人文研究第17巻第8号、1966年、52頁参照)。この疑問の解明を作品の実態のなかに探る作業は、わたくし自身にも残されているし、ホフマンにも残されている。惜しいことに彼はここで、この問題については単に触れるにとどめると述べているのである。

論者ホフマンの興味はむしろ、形式面におけるピカロ小説との差異を、更にすすんで別の分野に求めるところにあった。それはこのドイツの作品には「意識的な構成」(eine bewußte Komposition)が存在することである。論者ホフマンはこれをふたつの方向から観察している。彼によればまず第一に、多くの挿話の組み立てがきわめて計画的で、小説全体の展開に関連している。もちろんすべてが厳密に形式的に、また作品のテーマにもとづいて、一貫した筋に組みこまれて

いるとはいえず、この点、もとよりその種の意識がきわめて明瞭にあらわれているゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』(Wilhelm Meister) などとは異なるが、しかしだからといって、単に制約を知らない物語の意志だけが次々と挿話をつなぎ、話の緊張を保っていったと断じることがとうてい不可能である。——この事実の認識についてはわたくしも同感である。作品を詳細に読めば、なるほど多くの亀裂や断絶も目立つであろう。しかし同時に出来事の多くが慎重に築かれた構造の枠内で展開されている様子も目にとまるはずである。しかしわたくしは、構造における長所が短所を埋め合わせするなど論じるものではない。かんじんなことは、グリムメルスハウゼンの作品構成がピカロ小説のそれとは違う次元に立脚していることを認めることである。ここでは簡単にふれておくが、そのことを理解するためには、ドイツ・バロック文学理論に親しむことが必要なのである。

次に論者ホフマンは、意識的な構成を裏づける第二の重要な点として、人物の作中登場状況をあげている。ピカロ小説では作中人物は、もちろん主人公をのぞき、いったん現われたら二度とふたたびもどってこない。事実上筋の上でも、また、主人公の意識のなかでももどってこない。絶対的にそうだときめつけてしまうのは行きすぎであるが、しかしそれが普通である。けれどもグリムメルスハウゼンの小説ではそういう再会がしばしば起こるといふばかりではなく、その多くは主人公の人生行路に対して重要な意味をもっている。その場合とくに問題になるのは良友ヘルツブルーダー(Herzbruder)と悪友オリヴィエ(Olivier)に対する主人公の種々の関係である。主人公はいわば振子のように、これら善悪の両極のあいだを揺れ動く。更にいえば、作中の脇役人物が、同じ作家の手になる別個の独自の作品の主人公、中心人物になるという例は、ピカロ小説ではまったくない。——これはもちろんクラージェ(Courasche)、シュプリングインスフェルト(Springinsfeld)を指していつているのである。——したがって結論的にこの作品は、ピカロ小説に多大の恩恵をこうわり、またそれらと多くのものを共有し、更にはピカロ小説の手本なしには考えられないものであるけれども、どうしてもピカロ小説というジャンル概念では十分に捕捉できないことがわかるのである。——およそ以上のようにホフマンは述べているが、登場人物の問題に関しては形式的なものと内容的なものがここでも互いにからみあっている。つまり構成の問題を内容の問題と関連させて考え、これまで内容に偏していたものを構成の面からも再検討しようという姿勢である。それはそれなりに正しいが、さきにもふれたとおり、そのためにはまず、この作品の構成とはなにかということを、基本的

に理解しておくことが必要であろう。ところで結論部に関しては、わたくしもかつてこれと類似の問題を提出したことがあった。つまりピカロ的要素は認めるが、しかし『ジンプリッツィシムス』をピカロ小説とまったく重ね合わせて眺めてよいのかどうか、少なくともそれだけですべてが解決されるのかどうか、という問題である（『グリムメウスハウゼンの諸問題』54頁参照）。これはまただれもが抱く問題であり、だれもがホフマンと同じように答える問題であろう。

総じてホフマンの論は、ピカロ小説との比較に関する部分がかつともすぐれている。これはたとえば奇しくも同じドイツの雑誌に、1926年に発表されたエーリヒ・イエーニシュの論文『冒険小説から教養小説へ』（Erich Jenisch, Vom Abenteuer- zum Bildungsroman, GRM 14, 1926）で、単純素朴に、冒険がいまや形成的出来事として作用し、人間にその本質を悟らせる役割を果たし、人間を発展させる、と規定したり、宗教的努力が主人公をついに無信仰者から決定的なカトリック信者へ成長させた点を強調したりして、したがってピカロ的冒険小説がドイツ的教養小説へ成長したのだと結論していることなどからくれば、ほぼ40年間の研究の歩みのあとをまざまざと見る思いがするのである。したがってここで展開されたホフマンの論説そのものは、高く評価してもよいであろう。そこで起こってくる問題は、だからといってこれがそのまま『ジンプリッツィシムス』教養小説論につながるかどうかということである。

たしかに『ジンプリッツィシムス』はピカロ小説と同一点をもっているが、しかし同時に「他のそれ以上のもの」(anderes und mehr)である。この「他のそれ以上のもの」の故にそれを教養小説と呼ぶことができるであろうか。——ホフマンはこのような質問の形式でいよいよ本論にはいる。この本論にはいるあたりから、残念ながらわたくしは、論者ホフマンと多くの点で異にした見解を抱かなければならない。当然のことながら教養小説を論じるためには、まず「教養」(Bildung)なる概念の規定から出発しなければならない。これもいわば古くして新しい問題のひとつであるが、ホフマンはここで過去における研究の成果を完全に度外視した独自の観念を打ち出しているのである。彼によれば、教養という概念は多層的で、複雑で、さまざまに分化しているけれども、第一次的には「教育的」(pädagogisch)なカテゴリーではなくて、「人類学的」(anthropologisch)なカテゴリーであることだけは疑えない。そしてこの語のこの意味と用法がより広く、より古く、しかもより深く、同時にもっぱら「教養小説」という概念の基礎に置くことが許されるのである。更に人間とは教養を必要とすると同時に、教養を受容することが可能な存在であって、人間を教養形成する (bilden) もの

は、まずなによりも、自然ならびに歴史社会的現象形態をすべて含んだ人生そのものである。英語で教養小説のことが好んで「人生小説」(life novel) と称されるのは決して偶然ではない。したがってこの意味で、人生において世界との出会いを通じて人間の生成、教養を物語る小説は、すべて教養小説と称することが許されるのである。——ホフマンの定義、というか提案の糸をたどるとおよそ以上のようになるが、この理論の根底には大きな錯覚があるようにわたくしには思われる。このような形、というよりもこのような感覚で教養なり教養小説という概念をとらえることが許されるのではなくて、まさにそれは許されないはずのものであろうからである。いうまでもなくここでは概念の極端な一般化、拡大化が行なわれている。論者ホフマンによればこの広さ (diese Weite) は教養という概念に必然的に付随する特性ということになるのであるが、問題なのはここで、精神的もしくは文学史的な定着の姿勢が、彼にはまったく欠けていることである。教養という語の根源的な意味がどうかということと、それが小説形態と結びついて教養小説という形態史的概念を生み出した過程とは別である。そしてわたくしたちが問いたさなくてはならないのは、もっぱらこのあとの方である。教養という語は近代に入ってから神秘主義的敬虔主義の影響をうけて、本来の意味から次第にへだたりをみせて精神的要素を色濃く帯びるようになったのと同時に、また、啓蒙主義の洗礼をうけて、厳密で積極的な社会的人格の形成を意味するようになったのであるが、その時点ではじめて、その理想の文学的表現形式として教養小説なるものが生まれたのである。少なくともそれが文学史的に観ずる場合の出発点であり、それこそがまさに文学史における教養および教養小説の原義なのである。これについては過去に幾多の業績があることは周知の事柄であり、論者ホフマンも決してそれを無視し去っているわけではないが、なおかつ彼がくりひろげる、いわば感覚的な論説だけでは、これまでの強固な理論の砦を破砕することは不可能である。

次いでホフマンは発展小説 (Entwicklungsroman) の問題へ移る。教養小説と発展小説は一般に同じもののふたつの呼称と考えられ、これらを分けることにさして意味がないとする見方もあるが、わたくしはかねてからこれには反対で、両者はたとえ同質的な点を含んでいようとも別種のもので、したがって小説形態史的にはこれらを分けることが望ましいと主張してきた (『教養小説と発展小説』——ジムプリツィスムスへの接近の試み——人文研究 第14巻 第11号, 1963年, 10~12頁参照)。もちろん先人の業績をふまえてのことである。したがって論者ホフマンがこの両者を分離するのが望ましいと提案しているのをみたとき、わ

たくしは胸を躍らせたのである。しかし次の瞬間、大きな困惑におちいってしまった。つまり、従前の考え方では、論ずる人の立場いかんによって二様に分かれているとはいえ、発展小説の方を教養小説よりも、より茫漠とした、より大きな範疇でとらえる方向が明瞭に主流を占めていたのである。ところがホフマンはまるでそれと逆の規定をしているのである。ホフマンはいう。自分の理解では教養の方が発展よりもより広い概念である。したがって教養小説の方が発展小説よりもより包括的である。なぜならば学術語としての発展は、本質的に成長生物学的領域に属し、そこから現代心理学にとりいれられて、同時にまた内容的にも規定されたからである。——その概念変遷の事実はさておき、おそらく論者ホフマンの最大のねらいは、心理学なる語を持ち出すことによって、発展小説を心理小説としてとらえるところにあつたのであろう。したがって発展小説はきわめて近代的な小説形態を意味することになる。この点では従前の主たる解釈とは逆である。ところでさきに教養においては語のもっとも原始的な意味から出発し、いま発展においてはその語のもっとも急進的な意味から出発して、小説形態の判別にまったく同じ平面で活用している不思議さは問わぬとしても、わたくしの関心からいってもっとも問題となるのは、ここでもまた、文学史的に概念を固定しようとする姿勢がまったく欠けていることである。教養小説とちがって発展小説の場合は、その語の起源も歴史も明らかではない。したがってその概念内容も必ずしも明白であるとはいひ難い。しかし異論百出しても、わたくしたちが現に呼びなれているような意味での発展小説を知っているのは過去においてであり、したがってそれは歴史的に位置付けるよりほかに方法がないとわたくしは思っている。発展小説論を独立させることは難しいとわたくしはかつて述べたことがあつた（『教養小説と発展小説』10頁，22頁参照）が、その困難さの前にとまどっているのは、あながちわたくしひとりではないのであろう。

そこで論者ホフマンによれば、グリムメルスハウゼンの小説『ジムブリッィシムス』は教養小説である。しかしこのような見解に対しては、すでに多くの方面から反論が加えられている。ホフマンによればこれらの反論は次の三点に集約される。第一は主として主人公の型姿とその特色に集中されるものである。中心人物がまとまった人格でもなければ、一回かぎりの特性をもった人格でもない。およそ一定の性格を備えた人物とか個人とかいうものではなくて、単に原則的な人間的様態を示すための機能性 (Funktionalität) を有する形象 (Figur) であつて、更には役割の担い手、単に典型 (Typus) もしくはもろもろの典型の連鎖を具体化したものにすぎない。したがって主人公をめぐる変化は各種の範例的



(beispielhaft) な段階の通過にすぎないか、あるいは、典型の連鎖のなかでの継起的な展開にすぎない。それ故に主人公はその体験によって成長し、成熟することなどはもちろんなくて、逆に、その前にあったことをすぐに忘れてしまう。世界との出会いは主人公の教養形成には役立たず、主人公は究極において、その行路の最後には最初と同じ人間である。そして彼が人生においてさまざまに行動した、その範例的な行為だけが問題となるのである。——以上が第一点であるが、これはバロック様式観に関連してきわめて重要な反論である。もとよりこれについてはあとで、ホフマンの見解とあわせてわたくしの思うところを述べなければならぬ。——次に第二は、主人公の非近代性に関するものである。『ジンプリツィシムス』を教養小説と呼んではならない。なぜならそこには近代的な意味での教養に対する努力がまったく見られないからである。——これはわたくしが前にも述べておいたし、あとでふたたび触れることになるが、まさに教養という語の定義に関連して重要な反論である。——最後に第三は、作品の倫理性にかかわるものである。『ジンプリツィシムス』は教養小説ではない。なぜならそこでは世界が完全な否定性 (Negativität) におおわれているからである。——これは宗教的な立場から発せられた反論で、作品の内容観察にはもとより大切であるが、形態論の見地からはあまり厳しく論議するには及ばないであろう。

さて論者ホフマンは、以上三つの異論に対してどのように反撃するのか。当然もっとも論議が集中されるのは、私形式で語られる主人公の作品中の歩みに、果して教養形式という呼び名に値する過程が認められるかどうかという点である。すなわち第一の反論に対してである。ホフマンはいう。なるほどこの小説には統一的な向上はなくて、似たようなことの不規則な復帰があるだけである。けれども主人公はその場合に決してつねに同一ではない。小説のはじめとおわりは、その間にあった世界との出会いが主人公の生と教養の道にぜんぜん意味がないというままで重なり合っているのではない。——これはもちろんこの小説が隠者物語ではじまり隠者物語で終わることを指しているのである。——小説のはじめとおわりはなるほど同じ形式で結び合わされているが、しかし、それは同じ平面でつらなっているのではない。むしろ、その間には一種の螺旋形運動 (eine spiralenförmige Bewegung) ともいべきものがある。直線性はないが、しかし上昇運動がある。もとよりこの場合に過去の解釈においてそうであったように、愚鈍、罪、罰、贖罪の各段階を区別できると信じるのは行きすぎであるし (vgl. Friedrich Gundolf, *Grimmelshausen und der Simplicissimus*, DVjs. 1, 1923), 愚昧から罪へ、罪から浄化への進展を本質的と感じるのも行きすぎであ

る (vgl. Wilhelm Scherer, *Geschichte der Deutschen Litteratur*, 1883)。ここにはそれほど明瞭な生成過程はなくて、むしろ不安定な揺れ動きがある。けれどもこの不安定性は、30年戦役の時の流れに身を委ねた弱い人間、その弱さにおいて典型的な人間の教養行程にとって特徴的なしるしと眺めてはいけないうか。——ここで一段落をつけて、論者ホフマンの見解を考察しなければならぬであろう。まず第一に主人公が作中を通じてつねに完全に同一ではないというホフマンの説には、わたくしも原則的には賛成である。この小説を読み通してみると、主人公がはじめからおわりまで、まるで人形のように凝固した存在であるとは、よほど形骸化した精神の持主でなければいぬであろう。論点を集約するために、ここでもっぱら問題となっている作品の発端と結末の類似性についてのみ述べるとすれば、わたくしは更に、元来5巻からなっていたこの小説の続編 (*Continuatio*) 第6巻の終末で、南海の孤島に漂着して申し分のない世捨人の境涯にはいるという形式で、隠者物語が三度目に徹底的に繰り返されるという事実を強調しておかねばならない。ところでこれはたしかに同じ平面における繰り返しではないが、しかし、そこに果して上昇運動と名づけるほどのものが存在するであろうか。また存在するとすれば、それはどのような意味での上昇なのか。この点を明瞭にすることが『ジムプリツィシムス』教養小説論を展開するためには不可欠なのである。周辺世界との対応の姿勢において上昇があったとするならば、それは積極的な意味なのか、それとももっぱら内面的・精神的意味なのか。論者ホフマンの眼がこのあとの方に向けられていることは確かである。この論説全体において二度にわたって「キリスト教的道徳主義者グリムメルスハウゼンにとって……」 (... für den christlichen Moralisten Grimmelshausen) という表現が、大した顧慮も払わずに、まるで自明の事柄であるかのように使われているのを見ると、論者ホフマンにとってこの作品の宗教的理解は、もはやなんら説明を要しない大前提であるかに思われる。ところがそのような宗教的見地からは上昇運動などという近代的な概念は使えないであろうし、またその使用をかりに許容するとしても、まさにそのような宗教的倫理性は、教養小説が本来要求する倫理性とは別種のものである。ドイツ教養小説の代表作、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』では、宗教上の問題が形式的にも内容的にも背後へ押しやられてしまっていることを思い起こす必要がある。このことは教養小説の本質的なあり方にかかわっている。したがってわたくしは、グリムメルスハウゼンの小説におけるこの現象を、上昇とは逆に、むしろ自己への沈潜という形でとらえた。また事実かつてわたくしはこれと同じことを別の言葉で表現したことがある

(『教養小説と発展小説』12頁, 16頁参照)。わたくしにとってはこのことが、この作品を未だ教養小説の系列へ組み入れることを許さない、大きな原因のひとつであったのだ。つづいてこの節で触れておかなければならないことに、不安定性と30年戦役との関係がある。論者ホフマンはグリムメルスハウゼンにおける有名な命題「変動」(Unbeständigkeit)と主人公の作中における行動の不安定性(Unsicherheit)とを混同し、更にそれを30年戦役という特殊の歴史的條件に結びつけている。変動は所与の世界に受動的に身を委ねて流転する以外には生き方を知らない当時の人間の定めを指し、その根底にはいうまでもなく「無常」(vanitas)の觀念が働いているのである。したがってそれは作中人物の生成過程における動揺という意味、更にいえばヴィルヘルム・マイスター的意味での不安定性ということとは決してつながらない。同種の現象は必ずしも同質の現象ではない。更にまたこのような命題の源泉を一挙に当時のドイツが持っていた特殊的社会状況のなかにのみ求めるのは、当を得た観察方法とはいえない。なるほど30年戦役はこの作品に大きな影響を残している。しかし、それをあまりに重視して、この中からすでに体験文学的要素をかぎとろうとするのは、それに先立つ世界観的考察を没却させる危険をはらんでいる。もっともこの種の考え方はひとりホフマンのみのものではなく、過去にも例が多い(vgl. Emil Ermatinger, Weltdeutung in Grimmelshausens Simplicius Simplicissimus, 1925. Melitta Gerhard, Der deutsche Entwicklungsroman bis zu Goethes ‚Wilhelm Meister‘, 1926)。先に述べた、その他の点では非常にすぐれているといえるピカロ小説との比較の項でも、論者ホフマンは、30年戦役の体験についてピカロ小説はなんらあざかり知るところがないという点を、ドイツのこの小説との大きな相違点のひとつとして挙げている。たしかにそうではあろう。しかしその結果、この作品が生まれたのではなく、むしろ逆にバロック時代に固定した世界観の反映として、30年戦役はこの作品のなかにうつし出されているのである。簡単にいえば、戦争もまた範例的性格を帯びているのである。

そのような作品の範例的性格の論議に関連することであるが、次に論者ホフマンは、主人公がただ役割の担い手であり、機能を果たす人形に過ぎないという意見に立ちむかい、たしかにそれが本質的であるけれども、単にそれだけではなく、主人公には形象としての存在以上のものが備わっている点を指摘する。彼はいう。個人性への萌芽、ときどき見られる単なる典型性からの逸脱が付け加わっていることは、ジンプリツィシムス形象論者でさえも認めているが、自分は単なる萌芽以上のものがあると思っている。この「それ以上のもの」はまさに「物語る私」

(das erzählende Ich) に付着する特性である。「物語る私」として主人公は個人であり、人格であって、形象ではない。「行動の私」(das Ich der Handlung) と「語り手の私」(das Ich des Erzählers) とを区別しなければならない。しかし、たとえ形象性もしくは典型性にアクセントを置いて、それでもこの小説を教養小説と称してはいけないということにはならない。ここにはたしかに教養が存在するからである。そして教養概念を不当に狭めて、ゲーテ時代および19世紀、更には20世紀の文学にのみ教養小説は可能であって、それ以外の非常に多様な方法では許されないだろうとするのは、それ自体どこか奇妙な点をもっている。——この前半部ではピカロ小説との差異を論じた場合と同じく、この小説における「私」の問題を新しい手法で眺めなおそうとする姿勢がある。もとよりホフマンの場合は、近代的なものの発現を認める論者の前提があつてこそ、この方法も内容的に生きてくるのであつて、問題はここでその論者の前提が誤っていないかどうかということである。この点に関して、過去から現在にいたるまで賛否両論がある。しかしいずれにせよ、従前にはないものの芽生えそのものを、この作品から完全に抹殺してしまうことは、だれにとつても難しいであろう。したがつてその事実をこの小説の「私形式」の特殊性に結びつけて考えることは、わたくしには充分に妥当性をもっていることのように思われる。そして「半個人」(Halbindividuum, vgl. Günther Giefer, Held und Umwelt in Grimmlausens ‚Simplicissimus‘, 1937, S. 28) という異様な呼称を与えられた主人公の「私」のなかにいわば「半近代」を探ってみる仕事は、なかなか興味がありそうに思われる。しかしそれは極度に保留をもつて行なうべき作業であつて、「物語る私」としての主人公はとりもなおさず個人であり、人格であるという結論は、いうまでもなく早急である。次いでまた、ホフマンの論説の後半部はわたくしには納得できない。すでに述べたことから明らかなおおりに、教養概念の把握の仕方がわたくしとは、というよりも従前の決定的な解釈とはへだたりがありすぎるし、それにとにかく形象性あるいは典型性にアクセントを置くことを認めるならば、本来象徴性の文学として理解されるべき教養小説という観念は浮かんでこないはずのものである。

そこで論者ホフマンが、形象といい、典型といい、あるいは範例というものを、どのように理解しているかが問題となってくる。彼はいう。最近この小説の主人公の範例性 (Beispielhaftigkeit) が強調されることに眼をむけても、範例的な形姿がどうして教養小説の担い手であることはできないのであろうか。この観察方法は決して新しいものではない。たとえば「ジムプリツィシムスは人類

の原型を提示した」(Rodolfo Bottacchiarì, Grimmelshausen. Saggio su „L'avventuroso Simplicissimus“, 1920, S. 180) とか、「ジムプリツィシムスの人生行路は、象徴的にみれば、全人類の道としてあらわれているのである」(Hans Heinrich Borchardt, Geschichte des Romans und der Novelle in Deutschland, 1926, S. 164) とかいった発言がすでに過去において存在する。ヴィルヘルム・マイスターやハインリヒ・レーはジムプリツィシムスと比べて際立った特性と個人性を有し、完全な人格であるけれども、これらの小説のなかで範例的なものが問題とならず、もっぱらヴィルヘルムやハインリヒの個人的で一回かぎりの運命が問題になっているというのは絶対にあたらない。そこにはつねに時代の問題、困難、そしてそれを解こうとする試みが入ってきている。更にいえば、この超個人的な、時代典型的な問題性、および詩人の単に個人的・伝記的以上の関心がなければ、『ヴィルヘルム・マイスター』を筆頭にして現在にいたるまで、およそ普通に教養小説と称されるもののいっさいは存在しない。この点から眺めれば、グリムメルスハウゼンの小説もひとつと主張するほど違ってないし、ましてや根本的に相違することはないのである。——結論部はあまりにも大胆にすぎるので、批判は各人にまかせてわたくしみずからは沈黙を守ることにするが、この論旨の展開でもっとも問題となるのは、論者ホフマンにおいては範例と象徴との区別がまったくなされていないことである。範例とはバロック時代において、所与の法則を顕示するために文学作品中に投入された具体例の意味である。したがってそれは単に形象であり、個性的な肉づけをもたないのである。それがここでは普遍拡大されて用いられ、煙幕のように全体をつつみかくしてしまっている。1920年代においては未だ「象徴的にみれば」というような表現でバロック文学をとらえることが許されたとしても、それをいまにいたるまで継承して自説の拠りどころとするのは、いさか奇異である。逆に象徴というものを考えれば、それは範例のように客観的に厳密な限定性をもつものではなくて、無限の可能性をうちに秘めているものであろう。

次にグリムメルスハウゼンのこの小説の主人公が近代的な意味での教養への努力を示していないという第二の異論については、すでに察しのつくとおり論者ホフマンは、自己の展開する教養概念の拡大解釈をもって対抗する。これについてはもはや多くを語る必要はないであろう。ただ教養小説における教養概念の時代的制約性を明示する意図で、ドイツ市民主義の発達とドイツ長篇小説の発展とを結合させて考究したある論著で、「『ジムプリツィシムス』を教養小説に仕立てあげるほど、この作品を根本的に誤解する仕業はない」という発言がなされてい

ることを紹介しておく (Arnold Hirsch, *Bürgertum und Barock im deutschen Roman*, 2. Aufl. 1957, S.54)。次に世界が否定に充ちているという第三の異論に関しては、先に述べたとおり、ここはそれを多く論ずる場ではないが、論者ホフマンによれば、世界の克服は完全に教養の目的でありうるので、世界の汚濁と教養小説の成立とは矛盾しないという。そして彼は「キリスト教的道徳主義者グリムメルスハウゼンにとって」は、世界の否定的様相の克服こそがあらゆる詩的造型にまさる根本要求としてゆるぎなく立っている旨を宣言している。この一方的宣言については、論評の余地は充分にあるが、ここでは立ち入ることを差しひかえたい。

さて論者ホフマンは、以上の自説に立脚して、そういうわけであるからひとは今後も (weiterhin) あるいは再び (wieder) グリムメルスハウゼンのこの作品を教養小説と称してもよいであろう、つまりドイツ・バロックの教養小説と称してよいであろう、と提案している。そしてこの場合もとより教養小説という語の概念内容はこれまで支配的であった用法からはいくらか変化しているが、このことは教養というものの本質を振り返って考えることからどうしても必要なのだと、この概念の拡大適用を重ねて訴え、その訴えを補強するために、1950年代に出されたある論文で、『パルツィヴァル』(Parzival) が教養小説であることに決定的に賛成する見解が述べられていることを引き合いに出している。この論文は中世における教養思想をとりあつかったもので、これによると盛期中世ドイツ叙事詩のすべては教養小説の系列にくみいれられるという (Maria Bindschedler, *Der Bildungsgedanke im Mittelalter*, DVjs. 29, 1955)。——改めて説くまでもなく、バロックの教養小説というのは、たがいに異質のものを無理に膠でくっつけたような概念の連合である。現在の学問の世界に、どうしてもこれが安住しうる場所があるとは思えない。1920年代にこれとまったく同じ表現がみられる (H. H. Borchardt, a. a. O. S. 164) が、ほぼ50年をへて、ふたたびその素朴な世界へまいもどらなければならないというのであろうか。更に論者ホフマン以外の人によってではあるが、中世叙事詩にまでさかのぼって教養小説論が展開されている事実もここに明らかである。そこまで含めて再検討を試みるというのであれば、経過はどうであれ、結果的には、教養小説論の振り出しにもどる感じがする。

次いで結びにはいるまえに論者ホフマンは、なおひとつの重要な異論を反撃しておかなければならないという。それはグリムメルスハウゼンの創作に関して、単なる物語の興味 (Fabulierlust) をもっぱら強調する説である。論者ホフマンはこれに対してこの詩人の創作過程における意識性 (Bewußtheit) を対置する。

もしグリムメルスハウゼンにとって、ただ娯楽と教訓をまじえておもしろおかしく話の糸をつないでいくことのみ関心があったとすれば、この作品は教養小説と称しうるほどの問題性の深みをもたなかったであろう。しかし、かつて少数の人によって表明された、単なる物語の興味が彼の創作物の源泉であったという観念は、作品の多様な分析によってもうとくに否定されてしまった。そして今では造型芸術家としての意識性が一般に認識されている。しかし、その意識性の程度をたとえ低く評価しようとも、この作品の問題性はおのずから明らかではあるが、グリムメルスハウゼン自身が続編第6巻のはじめで、読者のひまつぶしや慰めとはちがう、他のそれ以上のもの (anderes und mehr) を欲しているのだと語っていることには、注意しなければならない。——論者ホフマンはおよそこのように述べて、現代の研究家のなかでも、殊にドイツ長篇小説の研究では決定的に有力なギュンター・ヴァイト (Günther Weydt) の次の言葉を援用して、自説の裏づけをはかっている。「グリムメルスハウゼンは、われわれの経験によれば『ジムプリツィシムス』においてきわめて厳密な考慮なしにはなにごともしななかつた」 (Günther Weydt, „Adieu Welt“. Weltklage und Lebensrückblick bei Guevara, Albertinus, Grimmelshausen, Neophil. 46, 1962, S. 118)。この単なる物語の興味をグリムメルスハウゼンの詩的本質と見なす立場には、わたくしもかつて共感を覚えたことがあった (『グリムメルスハウゼンの諸問題』59頁参照)。いまでは当然これに修正を加えねばならないと思っている。したがって造型的意識性を主張する立場をとり、そのかぎりでは論者ホフマンと一致する。しかし、ホフマンのいう創作過程における意識性は、彼が自説の裏づけに用いたヴァイトのいう厳密な考慮とは、またしても合致しないことを指摘しなければならない。つまりホフマンは、意識性があったから作品に問題性の深みが生じたという。彼にあってはそれが教養小説のあり方につながっているのである。しかし、ヴァイトが説くのは、およそバロック文学において作家はどのような創作技法を用いるのか、どのような構想を抱き、どのような構成をこころみるのか、という問題である。つまりヴァイトの言説はバロック様式論から出ているのである。あらためてくりかえすまでもないことであろうが、どうも論者ホフマンにはひとつひとつの事柄に対する明瞭な分析が欠けているように思われる。それともこのようなあいまいさは、教養小説論のあらたな展開に、どうしてもつきまとう宿命とでもいうのであろうか。

最後に論者ホフマンは自説の制限をこころみ、この作品を諷刺小説 (satirischer Roman) としてとらえる方向にも眼をむけて、これを是認したあとで、次のよう

な発言を行なっている。諷刺小説と教養小説とはたがいに排除しあうものではない。問題はいうまでもなく、どういう呼称で作品の核心、作品の意義および本質の中心をとらえるかということである。——当然のことを述べているようであるが、この発言はある意味で注目に値する。というのは、これは形態論的研究にまつわる解きたい困難を悟らせるものと、わたくしには理解されるからである。しかし、だからといって教養小説という形態概念を、バロックの小説にも適用しなければ、その作品の核心が把握できないというのであろうか。更にまた、いわば現在において膠着した教養小説の殻を破碎しようとする努力と、破碎するための武器である理論とは、果していつの日にか合致することがあるのであろうか。

わたくしのみるところ、論者ホフマンの説は、バロックのこの作品が「他のそれ以上のもの」(anderes und mehr) であるところに根拠を置いている。「他のそれ以上のもの」には三種が区別されて、第一にピカロ以上のもの、第二に典型以上のもの、第三に単なる架空物語以上のもの、がそれである。それらのすべてをわたくしは肯定するが、だからといってこの事実がただちにこの作品を教養小説として規定することにはつながらないということは、最後にもう一度くり返して述べておかねばならない。もとよりわたくしは、ホフマンのこの論文に対する評価の言葉は差しひかえるが、その価値のいかんにかかわらず、わたくしにとってこの論文が非常に興味があったことは事実である。そして、ドイツ人の教養小説にたいする郷愁のようなものを感じて、ふしぎな感慨にうたれたことを、最後に付け加えておきたいと思う。